人文学報 第517-9号　2021年3月

ローマ帝国におけるインド洋交易の位置づけ
――古代世界における東方交易の経済的・財政的重要性――

ラウル・マクラフリン
髙橋　亮介・赤松　秀佑訳

本稿では「東方交易歳入モデル」を説明する。これはローマ経済を史料に基づいて理解するための枠組みであり、『ローマと遠く離れた東方 *Rome and the Distant East*』（2010）で示し、『ローマ帝国とインド洋 *The Roman Empire and the Indian Ocean*』（2014）と『ローマ帝国とシルクロード *The Roman Empire and the Silk Routes*』（2016）で発展させたものである[1]。このモデルが示すのは、インド洋を通じて行なわれた交易が帝政初期にローマの歳入の約三分の一を生み出したということである。理解の枠組みとしてのこのモデルが最新の研究に与えた影響については結論部で簡潔に論評している。

このモデルは古代の史料を使い、史料中の証言と考古遺物から量的な推論を行なって構成されている。モデルは古代社会における港湾施設、航海技術、航海のスケジュール、交易ネットワーク、商品取り引き、文化的接触、外交関係、そして海外商品の使用と消費についての証拠を取り入れて統合した。こうして再構成されたローマ経済は、東方交易を軽視する伝統的な学説から大きくかけ離れたものとなっている[2]。

ローマ財政の史料

帝政期のローマの歳入について以下の情報が存在している[3]。

---

1 「東方交易歳入モデル」の概観については、McLaughlin（2014）の 1 ～ 3 章と補遺を参照。

2 東方交易の重要性を低く評価してきた研究者については、McLaughlin（forthcoming）‘Reconstructing the Roman Economy: The Views of Scholars on Eastern Trade and the Impact of Eastern Commercial Revenue Model’ 参照。

- ローマ内乱期に中央イベリアと南イベリアから得られる資金（紀元前49年）：1800万セステルティウス[4]。
- クリミア半島のケルソネソス地方からの1年間の貢納金（紀元前1世紀）：480万セステルティウス[5]。
- （紀元前50年に新たに征服された）大ガリアからの貢納金：4000万セステルティウス[6]。
- ポンペイウスによる東方征服以前のローマの歳入（紀元前65年）：2億セステルティウス。
- 大アナトリアとシリアからの歳入：1億4000万セステルティウス[7]。
- アナトリア（小アジア）から得ることができる歳入：6000万セステルティウス超[8]。
- パレスチナのヘロデの王国の主要な領地からの歳入（紀元前4年）：2200万セステルティウス[9]。
- バルサムを含むパレスチナからの歳入（44年）：4800万セステルティウス[10]。
- アナトリアのコンマゲネ王国からの1年間の歳入（18－38年）：500万セステルティウス[11]。
- （西アナトリアの500の都市からなる）属州アシアからの1年間の貢納金（125年）：2800万セステルティウス[12]。

---

3 McLaughlin（2014）: 228–229.

4 Caesar *BC* 2.18.

5 Strab. 7.4.6.

6 Suet. *Iul*. 25.

7 Plut. *Vit. Pomp*. 45.

8 ローマ属州アシアの歳入は2800万セステルティウス。前5世紀のペルシア帝国の領域面積と貢納額を根拠とすれば、大アナトリアでは、この値は倍になるだろう。ヘロドトスによればイオニアで520アッティカ・タラントン、リュディアで650タラントン、フリュギア・カッパドキアで468タラントン、キリキアで468タラントンである。Hdt. 3.90.

9 エスナルケルであるアルケラオスの領地（600タラントン）、ともに小王であるアンティパスとフィリッポスの領地（200と100タラントン）。
Joseph. *AJ* 17.11.4.

10 Joseph. *AJ* 19.8.2.

11 Suet. *Calig*. 16（20年間以上で1億セステルティウス）.

12 Philostr. *VS* 548.

この証拠は、支配下にある地域の多くがローマ帝国の歳入に大きな貢献していなかったことを示している。

ローマ人は、服従の象徴として支配下にある人々に貢納金を課し、現金や物資の負担を増やすことによって反乱を罰していた[13]。貢納金の額は長年続く取り決めによって定められている。そして、これが意味するのは、帝国中央政府がローマ支配下でより繁栄した地域からより多くの歳入を得ていたわけではないということである。ローマ政府は属州の境界を超える商品に約四〇分の一（2.5％）という比較的低い税率を課していた。そのため、帝国内交易は歳入の多くを占めていたわけではなかった。ガリアは、帝国支配下で大きく繁栄したローマの領域の例としてよく引用される[14]。しかし、ガリア地域を構成する諸属州はローマ政府に100万セステルティウスを納税するため、4000万セステルティウス分の農産物と他の傷みやすい商品を輸出する必要があっただろう。

ローマ人は支配下にあるほとんどの地域から比較的低額の貢納金のみを要求し、一般民に課される中央政府の税はごく少額であったようである[15]。『新約聖書』は、成人男性が払うローマの人頭税（*tributum capitis*）が 1 デナリウス、つまり 1 日の労働で得られる金額であったことを示している[16]。このことは、人頭税による歳入として100万人から約400万セステルティウスが徴収されたかもしれず、ローマ歳入の著しい増加のためにはかなり大幅な人口増加が必要だったことを意味している。財産税もまたほとんどのローマ属州で比較的低かっただろう。シリアのローマ臣民は査定された財産の額の 1 パーセントを 1 年間の地租（*tributum solis*）として払わなければならなかったとアッピアノスが報告している[17]。貢納金の額は古い取り決めによって定められ、地域の人口あるいは財産の増加は、必ずしもローマ帝国の歳入を大きく増やさなかった。それどころか、地域の農産物あるいは人口の増加は、各個人の負担の割合が減ることを意味していただろう[18]。

---

13 McLaughlin（2016）: 202.
14 Hopkins（1980）: 116.
15 McLaughlin（2016）: 202.
16 Matthew 20: 2.
17 App. *Syr*. 50.
18 McLaughlin（2016）: 202–203.

ほとんどのローマ属州は、多額の収入を生み出したり、それをローマに送ったりしなかった。そして、このことは金鉱と銀鉱がローマ経済に重要だったことを意味している[19]。ヨーロッパの境界での政府の軍事費支出の大部分は、新たに入手した貴金属を貨幣にすることで、まかなわれたかもしれない。グリーンランドの氷の汚染についての記録からは、帝政初期の銀採掘がカルタゴ・ノヴァでの産出のピーク（3600万セステルティウス）と似ていることが裏付けられる[20]。加えて、帝国はイベリアの金鉱山から少なくとも8000万セステルティウスを得ており、合計1億1600万セステルティウスとなる。さらに1世紀の産出ピークの期間に1年あたり最大8000万セステルティウスを生み出すヨーロッパの金鉱山から、追加の歳入を得ていた[21]。

1世紀に、ローマ軍団一つの金銭的費用は退役兵の退職金を含め約1100万セステルティウスだった。『ローマ帝国とインド洋 *The Roman Empire and the Indian Ocean*』中の「古代の数値と現代の推定 Ancient Figures and Modern Estimates」で概略を示したように、軍事費は以下のように示される[22]。

- 5000人の軍団兵に1年あたり900セステルティウスずつが支払われ、計450万セステルティウス[23]。
- 5000人の補助軍兵士に1年あたり750セステルティウスずつが支払われ、計375万セステルティウス。
- 54人の百人隊長（それぞれに13500セステルティウスが支給される）。4人の第一歩兵大隊百人隊長 *primi ordines*（27000セステルティウスを支給）；主席百人隊長 *primus pilus*（54000セステルティウスを支給）；5人の副官（45000セステルティウス）；軍団司令官（61000セステルティウス）。合計100万セステルティウス[24]。
- 25年の勤務後に支払われる退役時恩給（*praemia*）。約120人の兵士に1年あ

19 McLaughlin（2014）: 13–14.
20 Strab. 3.2.10. Hong *et al.*（1994）: 1841–1843のグラフを参照せよ。
21 Plin. *HN* 33.21.
22 McLaughlin（2014）: ‘Ancient Figures and Modern Estimates’.
23 5500人が1軍団の兵士の定員である；Campbell（1984）: 162–163。給料の控除と定員に満たない部隊については Campbell（1994）: 84。
24 Herz（2010）: 308–311.

たり12000セステルティウスが支払われ、合計140万セステルティウス。加えて補助軍兵士のために110万セステルティウスの恩給[25]。

- 加えて下級将校と補助軍将校の追加費用、騎兵の報酬（騎手あたり900セステルティウス）、軍馬の購入（頭金：500セステルティウス）と駄獣の購入費[26]。動物のエサはおそらく地方税を通して受け取った。

ローマの土地税は貨幣で、あるいは同等の価値の農産物で徴収された。農産物は、その後、近くの駐屯地に移されるか、自由な市場で売ることができるものであった。タキトゥスはローマ支配下のブリテン島の穀物税に言及し、ヨセフスはユダヤ戦争中の66年にユダヤの反乱者が「帝国の穀倉」から穀物をいかに奪取したかを述べている[27]。

ライン川地域の 8 軍団には8800万セステルティウスかかっており、さらに8800万セステルティウスがドナウ川の境界地域の 8 軍団に必要だった。4000万セステルティウスの貢納金が大ガリアに課された。それゆえ、帝国はライン川の境界に費やす4800万セステルティウスを徴収する必要があった。これは現金、あるいは原料、生産品、土地の供与のような資源で徴収されたかもしれない。イベリア半島からの合計 1 億1600万セステルティウスの価値のある金と銀は、貨幣の使用が普及していた地中海から大量の貨幣を送ることなくライン川・ドナウ川の軍団に払うのにほぼ十分だった[28]。この収入に、ネロ治世下にローマ帝国の歳入に7000万セステルティウスを加えたダルマティアで発見された金鉱を含めた貴金属の採鉱が加わった[29]。

この帝国の財政状況は、現存するローマの歳入に関する古代の史料によって支持される[30]。紀元前 1 世紀中頃の共和政ローマの総歳入は 1 年あたり 3 億4000万セステルティウスだった。プルタルコスは以下のように報告している。「銘板の宣するところによれば、国家の税収はそれまで5000万デナリウスだったが、

---

25 Tac. *Ann*. 1.17（現金での恩給に代わる土地の付与への不満）. *ILS* 2302; *CIL* 3.6580（退役兵の数）.

26 *Roman Military Records on Papyrus,* 83（馬の頭金）.

27 Tac. *Agr*. 19; Joseph. *Vit*. 13. McLaughlin（2016）: 202–203.

28 McLaughlin（2014）: 13–14.

29 Plin. *HN* 33.21.

30 McLaughlin（2014）: 1–17.

ポンペイウスが新たに獲得した土地から8500万デナリウスが納入されることになった」[31]。ユリウス・カエサルがガリアを征服したとき、彼は新たに服従させた領域に貢納金を課した。スエトニウスは、「カエサルがガリアの屈服した部分を属州にしたとき、彼らに毎年4000万セステルティウスの貢納金を課した」と伝えている[32]。しかし、帝国の収入がかなり増えたのは、プトレマイオス朝に3億セステルティウスの歳入をもたらしていたエジプトを、オクタウィアヌス（のちの皇帝アウグストゥス）が併合したときである。「キケロが、とある演説のなかでエジプトの歳入について話しているところによれば、クレオパトラの父であるアウレテス（プトレマイオス12世）は毎年12500タラントンの歳入を得ていた」とストラボンが伝えている[33]。これらの数字から算出される合計は、ローマ帝国が征服した領域から6億8000万セステルティウス以上を受け取ったことを示している[34]。

2世紀の間、ローマ帝国とパルティア間の境界の道を管理していたシリアの都市パルミラを通過する陸路交易からも、ローマ人は最大9000万セステルティウスを得ていた[35]。この数値を示唆するのは、3億6000万セステルティウスという同じ輸入総額が三つの通貨単位（デナリウス、スタテル、ミリアド）で記されているパルミラの70号塔墓のアラム語碑文である[36]。パルミラを介して購入された3億6000万セステルティウスの価値の商品は、アンティオキアと他のシリアの都市にいるローマの徴税人に9000万セステルティウス分の四分の一税の歳入を生み出しただろう[37]。別のパルミラの隊商の碑文はアンティオキアの四分の一税の税徴収人の存在を確認している[38]。

しかし、ローマの歳入に最大の額を加えていたのはインド洋交易だった。エジプトを通る国際交易に課される税によって2億7000万セステルティウスが、既に3億セステルティウスあるエジプトの歳入に加わり、ローマ帝国の収入を

31 Plut. *Vit, Pomp*. 45［城江良和訳；一部表記を変更］.
32 Suet. *Iul*. 25.
33 Strab. 17.1.13.
34 McLaughlin（2014）: 19–21.
35 McLaughlin（2016）: xix.
36 ウム・ベルキスの70号塔墓のアラム語碑文。
37 McLaughlin（2016）: 204.
38 *Inv*. 10.29（AD 161）. McLaughlin（2010）: 102.

1年あたり10億セステルティウス以上に増やしただろう[39]。フラウィウス朝の皇帝から庇護を受けた歴史家ヨセフスはエジプトが1年間でローマ帝国に5億7000万セステルティウス以上の歳入をもたらしたことを認めている[40]。この史料は、ローマが継続して繁栄するにあたっての国際交易の価値とインドや中国などの東方の経済圏の重要性を示している。

インド洋交易の規模に関する史料

「東方交易歳入モデル」の妥当性は、このモデルが古代の史料を意味づけるという事実に基づいており、かつて「疑わしい」として研究者によって退けられた多くの数字が実は歴史の現実を表していることを示している[41]。

ローマのエジプト総督の同行者でもあった地理学者ストラボンは、東方交易の規模に関する証拠を提供している。プトレマイオス朝期に20隻より少ない船がインドへ向かっていたのに対して、アウグストゥス治世の初期までに年間120隻のローマの船がインドへ向かっていたと、総督の視察に付き添ったストラボンは報告している[42]。この増加は、紅海の主要な港の大規模なインフラ発展を含む同時代の出来事を考えると信頼できる。紀元前26年、ローマ人総督ガイウス・アエリウス・ガッルスは自身が計画したアラビア半島征服のために、アルシノエで80隻の三段櫂船と130隻の兵員輸送船の建造を監督した[43]。ローマの巨大な貨物船の建造費に関する現代の試算は約30万セステルティウスであり[44]、700万セステルティウス分の価値をもつインドからの貨物一つで、20隻の船を新

---

39 10億8000万セステルティウス分の輸入品が、*tetarte*（四分の一税）と *portoria*（四〇分の一税）の対象になり、それぞれのために2億7000万と2700万セステルティウスが徴税され、合計2億9700万セステルティウスの歳入となった。McLaughlin（2014）: 19.［ただし、「『東方交易歳入モデル』とその後の影響（2010～2017年）」で示される計算の方が厳密であろう。］

40 Joseph. *AJ* 17.11.4; Joseph. *BJ* 2. 16.4.

41 東方交易を重要性を軽視する研究者については、McLaughlin,（forthcoming）‘Reconstructing the Roman Economy: The Views of Scholars on Eastern Trade and the Impact of Eastern Commercial Revenue Model’ を参照。

42 Strab. 2.5.12. McLaughlin（2014）: 4, 94.

43 Strab. 16.4.23. McLaughlin（2014）: 78.

44 Hopkins（1983）: 101.

たに建造する財源となりえたかもしれない。

長距離交易事業から戻った積み荷の価値についての証拠は、輸入税を管轄した政府の代理人によって課せられた金額を伝える「ムジリス・パピルス」に示されている。この文書の裏面は、ヘルマポロン号というローマの交易船に積まれたインドからの貨物の価値を、税引き後でほぼ690万セステルティウスと記録している。「ムジリス・パピルス」の積み荷一覧は欠損している。そのため、いくつかの積み荷の種類と量は、『エリュトラー海案内記』のなかの数値に関する情報と大プリニウスの『博物誌』から得られる価格の詳細を含む、別の史料から推定しなければならない。ヘルマポロン号の積み荷から出された、名前の分からないバラ積み商品は、463万632セステルティウスの価値があった。『エリュトラー海案内記』が示唆するところによれば、胡椒が南インドから戻る船に積まれて運ばれた主要な積み荷だったので、この商品は胡椒である[45]。プリニウスは、胡椒がローマポンドあたり16セステルティウスで売られたと記録している。おそらく帝国政府が税として受け取った東方からの物品の一部を保管していた *Horrea Piperataria*（香辛料倉庫）において、ローマで決定された国定の価格評価が用いられていたのだろう。したがってヘルマポロン号は135トンの胡椒を運んでいたことになる[46]。

『エリュトラー海案内記』は、南インドから戻るローマの船が「大量の胡椒とマラバトロンで満杯の積み荷」を運んでいたと報告している[47]。プリニウスは、胡椒が1ポンドあたり16セステルティウスのもっとも安い東方の輸入品の一つであり、200トンの胡椒がローマの市場で640万セステルティウスの値段だと記録しており、このことは「ムジリス・パピルス」で示された輸入品の価値を裏付けている[48]。ユウェナリスは、いかに「穀物あるいは胡椒を運ぶ」商人が「商品を船べりまで積み」、「1000タラントゥム（600万セステルティウス）のために危険を冒した」のか述べている[49]。『サテュリコン』のなかでも、600万セステ

45 *Periplus* 56.

46 ヘルマポロン号の積み荷135トンは、プリニウスが示す1ポンド16セステルティウスという価格を当てはめ、463万632セステルティウスとする。McLaughlin（2014）: 92–94.

47 *Periplus* 56. McLaughlin（2014）: 93.

48 Plin. *HN* 12.14.

49 Juv. 14.256–302.

ルティウスの価値をもつ積み荷を運ぶ地中海の船に投資する人物をペトロニウスは登場させている[50]。

インドを航海したローマの商船の大きさに関しては議論がある[51]。『学説彙纂』はアレクサンドリアからローマへ穀物を輸送する地中海の船について説明しており、「少なくとも 5 万モディウス（350トン）の積載量」がある 1 隻の船、「あるいはそれぞれ少なくとも 1 万モディウス（70トン）以上の容量がある複数の船」の船主に言及している[52]。とあるエジプトのパピルスには、1 人の実業家が所有しアレクサンドリアに到着した 9 隻の船の短いリストが記録されている。この文書は50トンから80トンの積載量がある 5 隻の船と230トンの船、そして410トンと記録されているオスティアからの空の穀物貨物船を記録している[53]。別のエジプトのパピルスは、総計1300トンの容量がある 8 隻の船（平均162トン）を所有する船主を記録している。別の実業家は合計500トン運べる 3 隻の船（1 隻あたり平均165トン）を登録した[54]。これは、紅海を通って航海するためにエジプトで建設されたであろう船のありうる大きさを示している。

比較すべきものを挙げると、スリランカ近海を航行していたインド船はワインのアンフォラ3000個に相当する150トンまでの積み荷を運ぶことができたとプリニウスが記している[55]。フィロストラトスは、インド洋を航海していたローマの貨物船が他の東方の船舶の大多数より大きかったと述べている。しかし、「エジプト人はこれらの船を他の人々が使用する船数隻分の大きさで建造する」と記述したとき、彼はアラブのダウ船について述べていたかもしれない[56]。ベレニケで発掘された埠頭の一部には、ローマの商船が係船するための広い間隔があった。これらの間隔は、最大350トンの容量までの積み荷を載せられる最大120フィートの長さの船を受け入れることができた[57]。ただしほとんどの船は、この大きさよりも小さかったであろう。2014年、中型の大きさ（165トン）と推

---

50 Petron. *Sat*. 76. McLaughlin（2014）: 104.
51 De Romanis（2015）: 127–50. Morelli（2011）: 199–233.
52 Justinian, *Digest,* 50.5.3. McLaughlin（2014）: 23–24.
53 *P.Bingen,* 77. McLaughlin（2014）: 24.
54 *P.Oxy*. 10.1259 and 17.2125（3 世紀）. McLaughlin（2014）: 105.
55 Plin. *HN* 6.24. McLaughlin（2014）: 196.
56 Philostr. *VA* 3.35. McLaughlin（2014）: 95–96.
57 Sidebotham（2011）: 195.

定される船の骨組みがベレニケで発見された。あるいは、その構造が底部の骨組みだったならば、その船は比較的大きかったかもしれない（最大380トン）[58]。この貨物の大部分は、船員のための物資と居住空間に利用されていたかもしれない。「ムジリス・パピルス」はヘルマポロン号が少なくとも220トンの総貨物を積んでいたことを示している[59]。

約900万セステルティウスの価値があるヘルマポロン号の積み荷に課された輸入税は225万セステルティウスだった。そして、この規模の交易はローマ帝国に少なくとも毎年 2 億7000万セステルティウスの税収をもたらしていたかもしれない[60]。この金額はローマが帝国を維持し、繁栄を支え、そして軍団への支払いをするのに必要な歳入の約三分の一である。

『エリュトラー海案内記』は、50年頃にインドへの航海に携わっていたギリシア・ローマ商人によって書かれた商業案内書である[61]。『エリュトラー海案内記』は東方の港で取り引きされた商品を列挙するだけでなく、海路、危険要素、目印、港、そして他の安全な停泊地に関する情報を含んだ航海案内書でもある[62]。『エリュトラー海案内記』で著者が「かつて人々はより小さな船を航海に使い、湾に沿って進んでいた」と報告しているとき、それはおそらくプトレマイオス朝時代のことについて述べている[63]。仮にこれらの船が75トンの船であったら、ヘルマポロン号は約 3 倍の積み荷（220トン）を積めたかもしれない。この比較に基づくと、75トンのインドからの積み荷は300万セステルティウス以下の価値だったかもしれない。したがって、ストラボンがプトレマイオス朝時代に 1 年あたりエジプトからインドに向かうギリシア船が20隻以下だったと記録しているのは重要である[64]。これは、交易品の価値が6000万セステルティウスに満たないこと、四分の一の輸入税の課税による国家歳入が1500万セステルティウスより少ないことを示している。たとえ、より大きな船が使われたと想定して、

58 Kotarba-Morley（2017）: 193–194.

59 McLaughlin（2014）: 89–91. *P.Vindob*. G. 40822. 積み荷は、胡椒（135トン）、マラバトロン（83.9トン）、ナルドス（1.3～3.4トン）、象牙（4.8 トン）、亀甲（2.3トン）。

60 McLaughlin（2014）: 94.

61 McLaughlin 110–112.

62 McLaughlin（2010）7–9.

63 *Periplus* 57.

64 Strab. 17.1.13. McLaughlin（2014）: 77.

この数値を2倍にしても、総価値はローマ時代の東方交易と比較して大きな額ではない[65]。

プトレマイオス朝時代の東方交易からの歳入についての低い数値は、ダンカン・ジョーンズが再構成した紀元前および後1世紀のエジプト財政と一致する。ダンカン・ジョーンズは、エジプト内の経済と地中海交易が1年あたり約2億5900万セステルティウスの歳入を生み出したと計算している[66]。これは、プトレマイオス朝の歳入を3億セステルティウスとしたストラボンの数字を約4000万セステルティウス下回っている[67]。古代の史料は、プトレマイオス朝時代の交易が比較的低いレベルで行なわれていたという見解を補強する。タキトゥスは、(紀元前31年から69年までの)「アクティウムの海戦が終わってからセルウィウス・ガルバを帝位につけた戦闘までの一世紀に、贅沢な食事への出費は段違いになった」と述べている[68]。この時代に輸入された他の東方からの商品は、宝石、装飾品、衣服の新しい流行を生み出した。プリニウスは、紀元前30年に「アレクサンドリアが我々の支配下に入ったあと、ローマで真珠が一般的に使われるようになった」と述べている[69]。

紅海の港の長期にわたる発掘と調査に基づき、サイドボトム教授はクラウディウスの治世からフラウィウス朝時代(41〜96年)、そしてトラヤヌスの治世(98〜117年)に至るまでベレニケとミュオス・ホルモスで交易活動の大幅な増加があったと信じている。アウグストゥス時代のおそらく120隻の船という活動に対して、150隻の船が交易の最盛期に出港していたかもしれないと彼は推計している[70]。この交易活動の拡大は，インドに出帆する船の大きさが、80トンから120トンへ、あるいは150トンから220トンへ増えたことが原因かもしれない。あるいは、交易の増加は東アフリカか南アラビアとのローマの交易関係の拡大も表しているかもしれない[71]。

ベレニケとミュオス・ホルモスでの活動が2世紀に衰退したことは、東方交

65 McLaughlin (2014): 76–82; (2010): 23–29.
66 Duncan-Jones (1994): 53.
67 Strab. 17.1.13.
68 Tac. *Ann*. 3.55.
69 Plin. *HN* 9.59. McLaughlin (2014): 25.
70 Sidebotham (2011): 218.
71 McLaughlin (2014): chapters 9–15.

易全体の規模の衰退の証拠として使うことはできない。なぜならナイル・スエズ運河がトラヤヌス治世（98～117年）の間に復活したためである[72]。この回復したルートにより、積み荷と乗客がアレクサンドリアから、インドへ向かう外洋船が出航する紅海の主要な港まで直接航行することが可能になった。運河による輸送はラクダのキャラバンによる陸路での輸送よりも約六分の一安く、多くの商人と他の旅行者は砂漠の苦難を避けるためにこのルートを使った[73]。ルキアノスは、アレクサンドリアの学生がナイルの川船に乗って、スエズ湾の奥にあるアルシノエ港に行き、そこで大型の船に乗り替え、インドへの航路をとるように説得されたと述べている[74]。交易活動はこのルートを使って行なわれ、ミュオス・ホルモスとベレニケの港は衰退することになった。

ローマ商人はより遠く離れた市場に行くために中継港を迂回したので、インドの遺跡での考古学調査によって長期的な交易の規模の変化を確かめることはできない[75]。『エリュトラー海案内記』からは、50年にほとんどのローマ船が南西インドで交易航海を終え、交易が特定の港に集中していたことが裏付けられる[76]。紀元150年にプトレマイオスが『地理学』を書いたときまでに、ローマの大型船はスリランカ周辺まで航海し、ベンガル湾の向こう側にある交易拠点に到達していた[77]。例えば、『エリュトラー海案内記』が伝えるところによれば、南西インドに輸出されたローマの商品はタミル人の船に乗せられ、ポドゥケ（アリカメドゥ）と呼ばれる東海岸の交易地に運ばれた。『エリュトラー海案内記』は、ポドゥケと近隣の交易地を、マラバルの海岸からの「ローマの貨幣と他の製品」を取り扱う「地元の船の母港」だと述べている[78]。何百ものローマの陶器の破片がアリカメドゥで発見され、それらの約半分がイタリアのワイン壺だった[79]。シンハラ人からの使節が52年頃にローマに到着し、スリランカは迂回できるという報告がもたらされたあと、ローマの商船はより遠い消費者市場に到

72 Ptol. *Geog,* 4.5. Sidebotham（2011）: 181. McLaughlin（2010）: 33; （2014）: 86–87.
73 Greene（1983）: 40.
74 Lucian, *Alex*. 44.
75 McLaughlin（2014）: 86–87.
76 *Periplus* 51, 59. McLaughlin（2014）: 194–195.
77 McLaughlin（2014）: 196–200.
78 *Periplus* 60. McLaughlin（2014）: 200–202.
79 McLaughlin（2014）: 187–188.

達するためにタミル人の中継港を迂回したかもしれない[80]。

特定の考古学遺物の量は必ずしも交易の全体的な衰退を指し示すわけではない。アリカメドゥで発見されたアンフォラの破片の多くは、セラミック組成物のなかに黒い火山性砂岩（volcanic grit）を含んでおり、イタリア中部のカンパニア地方の粘土で作られたことを示している。ヴェスヴィオ火山が79年 8 月に噴火したとき、カンパニアのワイン産業は打撃を受け、ローマのインドへの輸出にも影響を及ぼした[81]。この危機により、おそらく多くのイタリア人実業家は、交易取り引きに際して地金やその他の製品への依存度を高めることを余儀なくされた。

インドで見つかるローマ貨幣は特定の時期における交易規模の発展を示しはしない。なぜなら地金が代替物として使われたからである[82]。タミル人は、特定の皇帝（ほとんどがアウグストゥスかティベリウス）によって発行された特定の貨幣を好んでいた。ローマ商人はこれらの貨幣を使うことで確実に良い条件で取り引きできたので、輸出用に特定のタイプの貨幣を集めるのに多大な労力を費やした。同様の状況が北ヨーロッパでも起こっており、タキトゥスは境界から離れた場所に住むゲルマン部族が交易取り引きで「信頼できる」ローマ貨幣を得るのを好んでいたと述べている。彼らは「古くてよく知られたお金、二頭の戦車を象った貨幣」を好んでいた[83]。 6 世紀に執筆した、ギリシア人旅行者コスマスは、「輸出用に特別に選別された明るい金属から精巧に形成された貨幣」について言及し、デザインと質に基づいてローマ貨幣が東方への輸出用に選ばれていたと説明している[84]。

特定の種類の貨幣を含む退蔵貨幣は、輸出時期を正確に示していないかもしれない[85]。インドで見つかったほぼすべてのデナリウス銀貨は、新たに発行される貨幣に卑金属を混ぜることを導入したネロ帝による64年の通貨改革以前に造幣されたものである[86]。この改革は、おそらく東方交易に直ちに影響するこ

---

80 McLaughlin（2014）: 196–200; （2017）: 1–41.
81 Williams（2004）: 441–450; McLaughlin（2014）: 187–188.
82 McLaughlin（2014）: 187–192.
83 Tac. *Germ*. 5.
84 Cosmas Indiopleustes, *Christian Topography*, 11.338.
85 McLaughlin（2014）: 187–192.
86 Tchernia（1997）: 264–265.

とはほとんどなかった。なぜなら、何百万もの改革前のデナリウス銀貨がいまだ流通していたからである。南インドで発見されたデナリウス銀貨のなかには、帝国内で数十年間流通していた古い貨幣と同じ激しい摩耗の証拠をもつものがある。これらの銀貨は、おそらく70年から100年の間に輸出された[87]。例えば、ブディナサムの退蔵貨幣から見つかったひどく摩耗しているアウグストゥス時代のデナリウス銀貨には、ウェスパシアヌス治世（69～79年）の付加刻印が刻まれていた[88]。ネロ帝によって開始された貨幣改革は新たに造幣されたアウレウス金貨の重量を減らしたが、金属の純度は変わっていなかった。これは、より新しいアウレウス金貨が海外市場では未だ地金としての価値があったことを意味している。しかし商人は、より多くの金が含まれていたため（新金貨の7.3グラムに対して旧金貨は 8 グラム）、より古い貨幣を輸出するのを好んだ。より重いユリウス・クラウディウス朝期のアウレウス金貨が 2 世紀に流通から消えたとき、ローマの商人はより新しく発行された金貨を用いるか、あるいは単に地金を使った[89]。インドで見つかった多くの退蔵ローマ貨幣は、ディオン・クリュソスモスが「インドに行く人々は交易を求めてそこに行き、彼らは主に海岸の人々と交わる」と述べているように、おそらくインドでの活動を示している[90]。

ローマ貨幣の金と銀の比率もまた時代を経て変わった[91]。アウレウス金貨はデナリウス銀貨の約半分の大きさと重さであり、これは25デナリウスが 1 アウレウスと等しいことを意味していた。重さに応じて、ローマ通貨は銀対金を約12： 1 の比率で評価した。インドの諸王国は銀に比較的高い価値を置いており、サカの碑文は北インドで同様に銀対金が10： 1 の比率だったことを示している[92]。64年、ネロは新たに発行されたデナリウス銀貨に少量の卑金属を混ぜ、新たに造られたアウレウス金貨の大きさをわずかに小さくすることによりローマ通貨を改革した。こうすることで政府の資金はおそらく増加したが、新しい通

87 MacDowall（1990）: 49–73.
88 Tchernia（1997）: 265–266.
89 問題と史料の十全な検証については、McLaughlin（2014）: 187–192を参照せよ。
90 Dio Chrys. *Or*. 35. 22.
91 McLaughlin（2014）: 187–192.
92 *Epigraphia Indica*, 8（Nasik Caves）; MacDowall（1991）: 151–152.

貨はローマ通貨の銀と金の比率を11：1とすることにもなった[93]。

エジプトからの史料は、トラヤヌスのダキア征服後すぐに金が豊富になったので、コプトスのような輸出市場での価格が一時的に約8：1の比率になったことを示している[94]。110年に書かれた、とあるエジプトのパピルスには「15（ドラクマ）で売っていた金は11（ドラクマ）に下がった」とある[95]。トラヤヌスは、銀対金の価値がインドの価格比率（10：1）と同じになるまでデナリウスに含まれる銀を減らすことでローマ通貨を改革した。この行動の帰結の一つが、新たなローマの貨幣が北インドの金融市場での為替レートの優位性を失うことだった。これは、特に古い通貨の供給が輸出需要に対して不十分になったとき、多くのローマ商人が輸出品を貨幣から地金に代えたことを意味している[96]。パウサニアスは、「インドへ向かう船の船員が言うには、インド人はギリシア（地中海）の積み荷と引き換えに産物を与えるだけだ」と報告し、そして「これらのインド人は大量の金貨と銅貨を自らもっており、そのためローマ通貨をありがたらない」ことを認めている[97]。これらの複雑な経済状況を勘案すれば、インドで見つかる貨幣の構成によって明確な商業の衰退を示すことはできない。

帝政期にローマ中央政府は財政が国際交易に強く依存していることを自覚していた。大プリニウスはウェスパシアヌス帝の顧問団に属し、貿易による歳入に関する情報を得られる立場にあった。アラビア、インド、そして中国からの産物に支払うために毎年ローマ帝国から1億セステルティウスの地金が輸出されたと彼は主張した[98]。彼は次のように報告している。「もっとも少なく見積もっても、毎年インドとセレス（中国）とアラビア半島は、1億セステルティウスを我らが帝国から奪い去る。これが、我々の女性と奢侈が我々に負担させるものである」[99]。インドとの海上交易に関しては、「インドは、我らが帝国から毎年5000万セステルティウス以上を流出させ、彼らがかけた費用の100倍で

93 McLaughlin（2014）: 187–192.
94 McLaughlin（2016）: 88.
95 *P.Bad*. 37.
96 McLaughlin（2016）: 88.
97 Paus. 3.12.4.［ただし、原文通りに訳せば、「それは彼らのもとには金や銀が豊富にあるにもかかわらず、彼らが貨幣というものを知らないからだという」（周藤芳幸訳）。］
98 McLaughlin（2014）: 190.
99 Plin. *HN* 12.41.

我々の土地で売られる商品を返してくることは重要な問題である」と述べている[100]。

1億セステルティウスという輸出額の数値は、ローマ帝国全体の年間支出を賄うのに必要な収入（9億セステルティウス）の約九分の一だった[101]。この状況が存続することが許されたのは、東方との交易が帝国政府に非常に利益のある歳入も生み出したためであった。5000万セステルティウスというプリニウスが挙げる数字は、おそらくエジプトからインドへ輸出される地金を指している。この解釈が基づくのは、船の大きさ、商品の価値、貨幣退蔵の証拠、古代の証言がなされた状況、そして一次史料のなかで示されるローマ人の経済に対する考え方である[102]。

南インドのマラバル海岸にある砂丘で見つかったコタヤム貯蔵は、ローマ帝国の貨幣に換算すると80万セステルティウスの価値がある8000枚のアウレウス金貨を収めた黄銅の壺で構成されている[103]。もしこれが貨幣の発送の典型例であるならば、1年間に5000万セステルティウスの地金を輸出していたのは60隻の船でありうる。そして、この数字は、紅海から出帆するローマ船の半分が交易取り引きにおいて地金が優位を占める南インドに直接向かったことを示唆する。

状況証拠に基づくと、南インドへ向かうローマの貨物は一つにつき9～10万セステルティウスの価値があったかもしれない。これは、南インドへの主な輸出品として貨幣や地金を記録している『エリュトラー海案内記』、コタヤム退蔵貨幣、インド・ローマ間交易での10倍の利益が上がることを記録する中国の史書『後漢書』、約900万セステルティウスというヘルマポロン号の積み荷の価値（真珠や宝石は含まない）、120隻という船団の規模に関するストラボンの情報、そしてヨセフスによって示された5億7000万セステルティウス以上のエジプトからの歳入額と一致する。史料は交易について以下のような一貫した印象を生み出す。

- エジプトからインドへのローマの輸出の総価値：1億セステルティウス超。

---

100 Plin. *HN* 6.26.

101 Hopkins（2002）: 200; 208.

102 さらなる情報については、McLaughlin（2010）, （2014）, and（2016）における十全な議論を参照せよ。

103 Turner（1989）: 8–9; 62–63. McLaughlin（2010）: 161; （2014）: 188–189.

- 戻ってくるインドの積み荷の総価値：10億セステルティウス超。
- インド洋交易が生み出す関税収入：2億7000万セステルティウス超。
- エジプトの歳入の合計：5億7000万セステルティウス超[104]。

それゆえ、プリニウスが伝える5000万セステルティウスという輸出額は、ローマの輸出の一側面を表しており、それは、おそらく主に南インドに向かう地金であった。これは、北インドとのローマの交易では、貨幣と地金があまり重要ではなかったとしている『エリュトラー海案内記』の記述と一致する[105]。貨幣袋（*marsippia*）を記録しているベレニケからの関税領収書から、貨幣が70年以前のローマ船に積まれていたことが裏付けられる[106]。3点の領収書は73～120個の貨幣袋（14600～24000デナリウス）からなる貨幣の発送を記録している。これは約58000～96000セステルティウスの価値をもつ銀地金を表しているかもしれない。これは、3タラントンの重さの銀地金が62年にベレニケに送られたことを記録している「ニカノル・アーカイブ」中の領収書と一致する[107]。この銀地金の量は約25000デナリウスに匹敵し、10万セステルティウス以上の価値があった。おそらく、これらの銀は南アラビアあるいはインドの港に向けて発送されたものだった[108]。『エリュトラー海案内記』によれば、バリュガザのグジャラート港で「ローマの金および銀の貨幣が、現地通貨に対するいくらかの利益が上がるものとして取り引きが求められる」という[109]。

プリニウスが言及しているのは地金についてであるという見解を支持するのは、富、所領経営、そして国の支出に対する同時代のローマ人の考え方である[110]。タキトゥスによれば、ティベリウス帝は東方からの商品への出費に関して元老院に書簡を送ったとき、「我々の富」の減少に言及した[111]。プリニウスは貨幣に関して、スリランカに到達したローマ船から押収された積み荷の財産に

---

[104] McLaughlin（2014）: 226–227に要約されている。
[105] McLaughlin（2014）chapters 12–14の概観を参照せよ。
[106] McLaughlin（2014）: 84–86.
[107] *O.Petrie* 290（22 July 62 CE）.
[108] McLaughlin（2014）: 84–86.
[109] *Periplus* 49.
[110] McLaughlin（2014）: 221–222.
[111] Tac. *Ann*. 3.53.

言及している（*denarii in captiva pecunia*）[112]。支配階級に属する人々の多くは、数百万セステルティウスの価値がある一族の大きな所領を管理する責任を負う、伝統的な土地所有エリートの出身だった。これらの家族の義務は、ローマの役人が帝国の経済活動を理解し、帝国の境界を超えた交易を評価する際の手本となった。ローマの支配階級の間には、強大な所領は自給自足を目指すべきだという強固な伝統があった。だが、こうした文脈のなかにおいて、余剰農産物を市場で売ること、あるいは交易をすることが所領に許容された[113]。逆に言えば、外部の資源を得るために多額の現金あるいは地金を費やすのは「非効率」で有害な慣習だとみなされていた。「もし価格が満足のいくものならオイルを売り、余ったワインや穀物を売りなさい……しかし家長は売り手であり、買い手であるべきではない」と大カトーは忠告している[114]。現金と地金の大規模輸出を伴う、ローマの遠く離れた東方との取り引きは、この慣習に反していた。それゆえ、東方交易は帝国を「うまく管理されていない所領」のように機能することを余儀なくさせた。このことが、プリニウスがこの貿易を数値で表した際に、地金の輸出の額を示した理由を説明しうるのである[115]。

東方交易は、帝国と「よそ者」との間の「適切な」貢納関係に関するローマ人の理念にも反していた。帝国外の人々は支配的な力をもつローマに敬意を表することが期待されていた。しかし、東方貿易はローマ人が帝国外の諸国から珍しい商品を手に入れるために支配領域の外に富を送るシステムを生み出した[116]。この貿易はローマの領土をないがしろにして外国を豊かにした。このことが、「ケルト人、インド人、（コーカサスの）イベリア人、アラブ人、そしてバビロニア人すべてが我々から貢物を引き出している」とディオン・クリュソスモスが非難する理由でもあった。「我々の領土に簡単に足を踏み入れることができない遠く離れた人々に向けて、長い道のりと広大な海を越えて銀を進んで確実に送り出す」商人によってローマの富が国外に持ち出されると彼は述べている[117]。

---

[112] Plin. *HN* 6.24.
[113] Mattern（1999）: 123–126.
[114] Cato *Agr*. 2（160 BCE）.
[115] McLaughlin（2014）: 221–222.
[116] 同書で詳細に論じられている。

ローマ政府がエジプトからインドへの地金輸出の価値を理解していた可能性を史料は示唆している[118]。東方への航海は季節的なものだったので、プリニウスの数字は出発直前の数か月間に集められた四分の一税から推計されているかもしれない。この時代には、すべての輸出品がコプトスの税関を通過し、私的な事業者が徴税権を得るために入札していた。ウェスパシアヌス治世に近衛隊長官であったティベリウス・ユリウス・アレクサンデルは、エジプトで四分の一税を徴収する権利を購入した人物の息子だった[119]。あるいはプリニウスの数字は典型的な地金および貨幣の輸出量に、ふだん出航する船の数を掛けた値に基づいているかもしれない。16年にティベリウス帝が元老院に「宝石のために我々の富が異国あるいは敵対する国々に流出している」と記した書簡を送ったことをタキトゥスは知らせている[120]。52年頃、イタリアの事業家一族のために働くローマの徴税官が、クラウディウス帝による歓待と謁見のためにローマに来たシンハラの使節に同行した。プリニウスによれば、シンハラ人は特にローマ通貨の質に感心していた[121]。だから交易の価値に関する情報は帝国中央権力に近い人々が入手できる正当な関心事だったのである[122]。

これらの数値の確証は、いかにローマ帝国の臣民が162年に船で中国に到達したかを記録している中国の史書『後漢書』からもできる[123]。おそらく彼らが、「ローマ人はパルティア（安息）やインド（天竺）と海上交易を行ない、彼らの利益は10倍である」という中国側の証言の根拠を与えたのだろう[124]。エジプト・インド間での10倍の価格の増加は、16世紀の交易記録からも確認できる[125]。したがって80万セステルティウスの価値があるコタヤム退蔵のような発送された地金は、800万セステルティウスの価値があるインドの貨物と取り引きされていた[126]。

---

117 Dio Chrys. *On Wealth*, 79.5.
118 McLaughlin（2014）, ‘Knowledge of Trade’: 2–5で詳細に論じられた。
119 McLaughlin（2014）: 4.
120 Tac. *Ann*. 3.53.
121 Plin. *HN* 12.41; McLaughlin（2017）: 1–41.
122 McLaughlin（2014）: 2–5.
123 McLaughlin（2014）: 207–210; （2016）: 192–196.
124『後漢書』巻88西域伝。
125 Braudel（1992）: 405.
126 McLaughlin（2014）: 188–189.

プリニウスはある種の商品のインド市場での価値がローマでの小売価格では100倍に増加するとも言っている。このことは他の史料とも一致する。「ディオクレティアヌスの最高価格令」は、紫に染められた絹が通常の白い絹の10倍以上の価値があったことを示している。インドとエジプトの間で10倍の値上げがあり、加工後に10倍に増加すると、100倍の価格差が生じる[127]。漢帝国の政策をめぐって宮廷でなされた議論が『塩鉄論』として伝わっている。そこで、とある大臣は、いかにして中国人が境界から3000マイル以上離れた地域から真珠と鉄を購入しているかを述べ、「原料費と元値を計算すると、外国からの輸入品の一つは、その価値の100倍の価格であることが分かる」としている[128]。『梁書』は、「論」（*Lun*）という名のローマ商人が230年に船で中国南部に到達し、「彼の出身地とその地の慣習に関する詳細を論が返答として報告書を用意して」孫権に報告したと記録している[129]。これが7世紀の『晋書』の典拠かもしれない。『晋書』は、3世紀の交渉に言及し、「インドは海路でローマと交易している。その利益は100倍である」（10倍の輸入額に代わる小売価格の値上げ）と報告して、ローマに関する以前の情報を修正している[130]。

ローマ経済理解の代替案としての「東方交易歳入モデル」

交易とその影響から生じる経済についての史料を位置づけようとする私の議論の出発点は2006年にまで遡る。しかし、「東方交易歳入モデル」が『インドと遠く離れた東方とのローマ交易 *Roman Trade with India and the Distant East*』（PhD, Belfast, 2006）で提示されたあと、以下の懸念を表明する学術的評価を受けた。

- 「古代の叙述史料にある一握りの疑わしい数字に基づいて建てられた量的な推測の塔は、批判的なそよ風が一吹きするだけで崩壊するだろう」。
- 「エジプトを通る交易路への四分の一税のみが帝国歳入の三分の一を構成するという主張は極めて疑わしい」[131]。

---

[127] Plin. *HN* 6.26. *Price Edict*, 23.1.1; 24.1.1. McLaughlin（2014）: 92.
[128]『塩鉄論』巻1力耕篇。
[129] McLaughlin（2016）: 198.［『梁書』巻54列伝第48諸夷。］
[130]『晋書』巻97列伝第67四夷。

にもかかわらず、このモデルの強みの一つは過去の学術的論争に言及することなく示せることである。『ローマと遠く離れた東方 *Rome and the Distant East*』（Bloomsbury, 2010）と Pen & Sword 社から出版された一連の著作は学術的論争を避け、古代史料に注目している。『ローマ帝国とインド洋 *The Roman Empire and the Indian Ocean*』（Barnsley, 2014）ではさらなる研究を行ない、より詳細な史料に基づいた「東方交易歳入モデル」を示した。この本は「古代の史料は、国際交易がローマ中央政府に帝国を維持する歳入の三分の一までをもたらしたことを示している」という見解を掲げて宣伝された[132]。

「東方交易歳入モデル」のその後の影響（2010～17年）

2014年、ケンブリッジ大学出版から『ケンブリッジ・コンパニオン ローマ経済 *The Cambridge companion to the Roman Economy*』が出版された。そこには「オックスフォードローマ経済プロジェクト the Oxford Roman Economy Project」のリーダーであるアンドリュー・ウィルソン教授の寄稿も含まれており、「交易に関するフォーラム Forum on Trade」でウィルソンは次のように記している。

> （ストラボンが 1 世紀前にミュオス・ホルモスからインドへ向かう船が年間120隻としているので、これは控えめな推計であるが）年間に100の貨物があれば、紅海を通る交易の輸入品への関税だけで、おそらく帝国の全軍事費の四分の一から三分の一に達するだろう[133]。

この「東方交易歳入モデル」を認める見解はウィルソンによって『大洋を超えて：インド・地中海交易をめぐる 9 つのエッセイ *Across the Ocean: Nine Essays on Indo-Mediterranean Trade*』（Brill, 2015）のなかでも繰り返されている。ウィルソンは、「帝国の総国家歳入は交易、特にインド・地中海交易からの関税収入を正しく認めてこなかったため、かなり過小評価されていたように見える」と説明している[134]。

---

[131] 2007年の Oxford University Press の査読者の意見。
[132] McLaughlin（2014）のカバーの袖の文章。
[133] Wilson（2014）: 290.

2017年、『ローマ世界における交易、商業、国家 *Trade, Commerce, and the State in the Roman World*』がオックスフォード大学出版から出版された。序論である「交易、商業、国家」で、東方交易の重要性がアンドリュー・ウィルソンと（やはり「オックスフォードローマ経済プロジェクト」に関わる）アラン・ボウマンによって再考された。彼らは「ダンカン・ジョーンズによって6億4300万～7億400万セステルティウスと推計された国の軍事費の三分の一が、紅海交易の関税収入だけで満たされるのは十分可能である」と考えている[135]。

これらの結論は私の既存の研究出版物で確立されており、これらの結論がローマ帝国の経済の働きを説明する枠組みを提供するのに重要だと私は信じている。繰り返すと、私の博士論文『インドと遠く離れた東方とのローマ交易 *Roman Trade with India and the Distant East*』（2006）で説明した経済の枠組みでは、ローマから東方への輸出品には高い輸出税（25％）が課され、1億セステルティウスのローマの富の輸出は年間2500万セステルティウス分の歳入を生み出したことになる[136]。輸入品にも四分の一税が課せられ、一隻の船に積まれた、およそ920万セステルティウス分の総貨物から230万セステルティウス分の物品を帝国政府は差し引いた[137]。このことから、230万セステルティウスの税が120隻の船それぞれに課せられたとすると、総輸入品から年間おそらく2億7600万セステルティウスの輸入品の所有権、あるいは税を国家が得たことを意味する[138]。さらに、もし属州間交易に課せられる四十分の一の関税（*portoria*）の対象となったのであれば、四分の一税徴収後の8億2800万セステルティウス分のインドからの輸入品は2100万セステルティウスの歳入を生み出しただろう[139]。したがって、エジプトを任地とする比較的少数の国家の役人が、地方の駐屯軍の助けを

---

134 Wilson（2015）: 24.

135 Bowman and Wilson（2017）: 14–15.

136 McLaughlin（2006）: 91–92.

137 すでに言及したプリニウスが語る200トンの船に積まれた胡椒の価値は640万セステルティウス、ユウェナリスが語る商人が運ぶ胡椒は600万セステルティウス分、ペトロニウスが語る貨物も600万セステルティウス分。税を徴収されたあとのヘルマポロン号の積み荷の価値690万セステルティウスと比較せよ。

138 McLaughlin（2006）: 93.

139 McLaughlin（2006）91–92. 四分の一の輸入税が引かれたあとのヘルマポロン号の積み荷の価値が690万セステルティウスであり、これに120隻をかけると8億2800万セステルティウスとなる。

借りながら、帝国の総収入の三分の一をもたらしていたかもしれないのだ[140]。

『ローマと遠く離れた東方 *Rome and the Distant East*』（2010）で、私は2500万セステルティウス以上の輸出税に加えて、10億8000万セステルティウス分以上の東方からの輸入品が国家にさらに2億7000万セステルティウスをもたらしたことを示した。それゆえ、エジプトの東の境界での徴税額は合計で年間3億セステルティウス以上になっただろう。アレクサンドリアから地中海に輸出された東方の商品は、一般に約四十分の一という比較的低い税率であった *portoria* と呼ばれる別の関税の対象となった。この税は、エジプトから国家が受け取る帝国の歳入に数千万セステルティウスを加えただろう[141]。その結果、帝国財政の三分の一が東方交易の税収から得られた。エジプトからの歳入以外には、他の属州で徴収される税が首都ローマに大規模にもたらされることはなかった[142]。

さらなる研究から、商品や地金を含むエジプトからインドへのローマの輸出品が1億セステルティウス以上の価値があり、2500万セステルティウス以上の歳入を生み出したことが確かめられた。それが漢代の文書であり、インドへのローマの輸出額（1億セステルティウス）とインドからの輸入額（10億セステルティウス）に10倍の差があることを示している。それゆえ、10億セステルティウス分のインドからの輸入品に課される四分の一税は、ローマ政府に年間2億5000万セステルティウスの歳入を加えただろう。さらに、アレクサンドリアで地中海に出る商品に課される10億セステルティウス分の商品に課される *portoria*（四十分の一税）が、年間おそらく2500万セステルティウスの追加の歳入を生み出しただろう[143]。

私が追加して行なった研究では他の境界地域からの史料も考察した。この研究もやはり、エジプトへのインドからの輸入が年間10億セステルティウス以上の価値があり、1世紀までにローマが紅海の境界で課していた四分の一税から2億5000万セステルティウス以上を得ていたことを明らかにした。また、ペルシア湾とイランを経由するパルティアの隊商路を通ってローマ支配下のシリアに入る東方からの商品への課税により多額の税収入を得ていたことも示した。

---

[140] McLaughlin（2006）155.
[141] McLaughlin（2010）: 164.
[142] McLaughlin（2010）168.
[143] McLaughlin（2014）: 19.

辺境の都市パルミラにある、とある碑文から、ローマが隊商の往来から少なくとも9000万セステルティウスの歳入を得ていたことが分かる。この数字を広く理解すると、カエサルがガリア征服で課した貢納金が4000万セステルティウスなので、ローマが国際交易から得た税は全支配地からの歳入を上回るかもしれない。ローマは帝国に資金を供給するために、毎年、最大10億セステルティウスを必要とした。そして、古代の史料はこの金額の三分の一がインド洋とイランを通って行なわれた東方交易への税から得られたことを示している[144]。

結論として、古代の史料と考古学遺物が示すのは国際交易がローマ政府に帝国を維持する歳入の最大三分の一を供給したことである[145]。そして、このことを考慮すると、ローマ経済とその歴史的発展を史料に基づき、数値を伴って詳細に復元することができるのである。したがって、ローマ経済についての将来の研究には、上述の「東方交易歳入モデル」において示したインド洋交易によってエジプトを通った輸入品に課された四分の一税がもたらした帰結が含まれるべきなのである。

参考文献

Bowman, A. and Wilson, A. 2017: ‘Introduction: Trade, Commerce, and the State’, in A. Wilson and A. Bowman（eds.）, *Trade, Commerce, and the State in the Roman World,* Oxford: 1–26.

Braudel, F. 1992: *Civilization and Capitalism 15th-18th Century,* volume 2, Berkeley and Los Angeles.

Campbell, B. 1984: *The Emperor and the Roman Army*, Oxford.

———. 1994: *The Roman Army,* London and New York,

De Romanis, F. 2015: ‘Comparative Perspectives on the Pepper Trade’, in De Romanis and Maiuro 2015: 127–150.

De Romanis, F. and Maiuro, M.（eds.）, 2015: *Across the Ocean: Nine Essay on Indo Mediterranean Trade.* Leiden.

Duncan-Jones, R. 1994: *Money and Government in the Roman Empire*, Cambridge.

Greene, K. 1983: *Archaeology of the Roman Economy,* London.

Herz, P. 2010: ‘Finances and Costs of the Roman Army’, in P. Erdkamp（ed.）, *A Companion to the Roman Army*, Chichester: 306–322.

Hong, S., Candelone, P. J., Patterson, C. C. and Boutron, C. F. 1994: ‘Greenland Ice Evidence of Hemispheric Lead Pollution Two Millennia Ago by Greek and Roman Civilisations’, *Science* 265: 1841–1843.

Hopkins, K. 1980: ‘Taxes and Trade in the Roman Empire（200 BC–AD 400）’, *JRS* 70,

[144] McLaughlin（2016）: xix.

[145] McLaughlin（2014）のカバーの袖の文章。

101–125.
———.1983: ‘Models, Ships, and Staples’, in P. Garnsey, K. Hopkins and C. Whittaker（eds.）, *Trade in the Ancient Economy*, Berkeley and Los Angeles: 84–109.
———. 2002: ‘Rome, Taxes, Rents, and Trade’, in W. Scheidel and S. von Reden（eds.）, *The Ancient Economy*, London and New York: 190–232.
Kotarba-Morley, A. 2017: ‘The Maritime Context of Trans-Mediterranean-Indian Ocean Trade: Critical Review of Roma Era Vessels of the Red Sea’, in D. A. Agius, E. Khalil, E. Scerri and A. Williams（eds.）, *Human Interaction with the Environment in the Red Sea*, Leiden: 171–206.
MacDowall, A. 1990: ‘Finds of Roman Coins in Southern Asia’, *Ancient Ceylon* 9: 49–73.
———. 1991: ‘Indian Imports of Roman Silver Coins’, in A. K. Jha（ed.）, *Coinage Trade and Economy: Third International Colloquium*, Nashik: 145–163.
Mattern, S. 1999: *Rome and the Enemy: Imperial Strategy in the Principate*, Berkeley and Los Angeles/London.
McLaughlin, R. 2006: *Roman Trade with India and the Distant East, 31 BC to AD 180,* Ph.D. Queen’s University Belfast.
———. 2010: *Rome and the Distant East: Trade Routes to the Ancient Lands of Arabia, India and China*, London.
———. 2014: *The Roman Empire and the Indian Ocean: The Ancient World Economy & the Kingdoms of Africa, Arabia & India*, Barnsley.
———. 2016: *The Roman Empire and the Silk Routes: The Ancient World Economy and the Empires of Parthia, Central Asia and Han China*, Barnsley.
———. 2017: ‘Ancient Contacts: The Roman Emperor and the Sinhalese King’, *Classics Ireland* 21–22: 1–41.
———.（forthcoming）: ‘Reconstructing the Roman Economy: The Views of Scholars on Eastern Trade and the Impact of Eastern Commercial Revenue Model’.
Morelli, F. 2011: ‘Dal Mar Rosso ad Alessandria: II *Verso*（ma anche il *recto*）del ‘papiro di Muziris’（SB XVIII 13167）’, *Tyche* 26: 199–233.
Sidebotham, S. 2011: *Berenike and the Ancient Maritime Spice Route*, Berkeley, Los Angeles and London,
Tchernia, A. 1997: ‘Winds and Coins: From the Supposed Discovery of the Monsoon to the *Denarii* of Tiberius’, in F. De Romanis and A. Tchernia（eds.）, *Crossings: Early Mediterranean Contacts with India*, New Delhi: 250–276.
Turner, P. 1989: *Roman Coins from India*, London.
Williams, D. 2004: ‘The Eruption of Vesuvius and its Implications for the Early Roman Amphora Trade with India’, in J. Eiring and J. Lund（eds.）, *Transport Amphora and Trade in the Eastern Mediterranean: Acts of the International Colloquium at the Danish Institute at Athens, September* 26–29, 2002, Athens: 441–450.
Wilson, A. 2014: ‘A Forum on Trade’, in W. Scheidel（ed.）, *The Cambridge Companion to the Roman Economy*, Cambridge: 287–320.
———. 2015: ‘Red Sea Trade and the State’, in De Romanis and Maiuro 2015: 13–32.

訳者解題

髙橋　亮介

本翻訳は、Raul John McLaughlin, ‘Indian Ocean Commerce in Context: The Economic and Revenue Significance of Eastern Trade in the Ancient World’, in: Matthew Adam Cobb（ed.）, *The Indian Ocean Trade in Antiquity: Political, Cultural, and Economic Impacts*, London/New York, 2018, 117–134の全訳である。本論考でなされる著者マクラフリンの主張は、東方貿易による税収がローマ帝国の財政に寄与する割合は極めて大きく、2世紀において帝国を維持するための必要な支出のうち最大で三分の一までが、エジプトから紅海を経てインド洋を渡って輸出される商品や金銀と東方からもたらされる商品とに課せられる税によってまかなわれていたというものである。著者はこれを「東方交易歳入モデル」と呼び、これまでエピソード的に取り上げられることの多かった東方貿易が帝国の繁栄に不可欠な要素であったと論じるのである。著者の議論の特徴は、現代の研究からはあえて距離を取り、古代の史料に見られる数値を無批判に受け入れつつ、それらの数値が整合的に理解しうることを示している点にある。

本論考でマクラフリンが自ら紹介するように、史料中で言及される数値を用いることに批判を受けたという。訳者自身もすべての数値をそのまま受け取ることに危うさも感じるし、史料に基づくとしながらもマクラフリンが引く史料の訳文は意訳すぎると思える箇所もある。だが、彼の大きな主張は、他の研究者によっても（彼の研究に直接言及することはないのだが）共有されるようになってきているのも現状である。彼の議論の核となるのは、ストラボンが伝えるインド洋に向かう120隻という船の数と、2世紀の「ムジリス・パピルス」に記されたヘルマポロン号の積み荷のリストによる商品の価値とそれらに課された税の額である。新しく発表されるパピルス史料などによって、ヘルマポロン号を例外として退けられなければ、「東方交易歳入モデル」を荒唐無稽なものとして否定することもまた難しいのである。東方貿易からローマが得た歳入の額については、今後、修正されたり留保が付けられたりするであろうが、マクラフリンが主張するように東方貿易のローマ国家財政への貢献を無視することは生産的ではないように思われる。

いくつかの書籍と論文で繰り返されるマクラフリンの議論は、ここに訳出した論考においても、自らの研究を振り返りながら、やや冗長ながらも明確に示されており、日本語に翻訳して紹介する価値があるだろう。日本では近年、東方交易について蔀勇造による詳細な訳注が付された『エリュトラー海案内記』の翻訳が出版され、『エリュトラー海案内記』に記される地名や商品、航海や交易の諸相に関する詳細な議論が供された一方で、ローマ帝国の財政についても英語圏の先行研究を中心にまとめた明石茂生の研究がある[1]。しかし、ローマ帝国の財政における東方交易の重要性を指摘した論述は管見の限りほとんどないのである[2]。翻訳の事情をより率直に言うと、訳者の一人である髙橋の指導を受けながら、ローマの東方交易に関心を持ち2020年度提出の卒業論文を準備していた赤松秀佑に参考文献として紹介したところ、期せずして全訳したものを見せてくれた。そこで著作権をもつ著者に連絡を取ったところ、発表を快く認めてくれた。

訳文は赤松が作成したものに髙橋が手を加えて完成させた。その際に著者と相談し、一部修正を施した箇所があるが、特に明記はしていない。ただし注における訳者の補足説明は角括弧内に示した。史料の引用については、著者の英訳を尊重したが、一部の訳についてはより原語に沿っている訳文を借用したり注に併記したこともある。また注における史料の言及において、ラテン語の略記の使用と英訳名の使用が混在しているが、前者は知名度が高いもののみに用いるという使い分けがなされていると判断し、そのままにしてある。ただし碑文・パピルス・オストラコン史料については慣例的に用いられる略記法に変更した箇所もある。また注における典拠の誤りは可能な限り修正し、著者の了承を取り、削除した注もある。

著者のマクラフリンは2006年に博士号を取得した後、大学で教壇に立ったが、現在は独立研究者として医療機関で働きながら東方交易についての研究を精力

1 蔀勇造訳注『エリュトラー海案内記』1・2、平凡社、2016年；明石茂生「古代帝国における国家と市場の制度的補完性について（1）ローマ帝国」『成城大学経済研究』185、2009年、1–91頁。

2 髙橋亮介「エジプト東部砂漠のローマ軍と『蛮族』」『軍事史学』54–2、2018年、66頁は、ウィルソンの研究を引きつつ、紅海からもたらされる交易品への課税額が、いくつかの属州から得られる歳入に匹敵することを指摘している。

的に発表している。専門的な学術雑誌への投稿よりも一般向けの書籍の執筆に力を入れており、本論考の主な議論がすでになされ、たびたび注に引かれる *Rome and the Distant East: Trade Routes to the Ancient Lands of Arabia, India and China*（2010）は、アラビア語とポルトガル語に翻訳されている。より一般向けに書かれた *The Roman Empire and the Indian Ocean: The Ancient World Economy & the Kingdoms of Africa, Arabia & India*（2014）はイタリア語に、内陸交易を扱った *The Roman Empire and the Silk Routes: The Ancient World Economy and the Empires of Parthia, Central Asia and Han China*（2016）は中国語に翻訳されている。